



二つの生き方—趙孟頫筆「二胡羊図」—

伊藤 大輔（美学美術史学）

明けましておめでとうございます。2015年は未年ですね。日本では羊はなじみのうすい動物で、美術では十二神将の未神の作例やそれと関連する「鳥獣戯画」乙巻の山羊図くらいがすぐに思いつくものでしょう。

羊の絵で印象深いのは趙孟頫（ちょうもうふ）の「二胡羊図」です。体の丸い羊と毛の長い山羊が並んで描かれています。山羊がかすれた筆でストロークの長い筆遣いなのに対して、羊は水気の多い墨で、点描のような細かい筆致を用いています。二頭の描法を対比して、画家の技量の幅広さを誇示しています。趙孟頫はこの絵を写生によって描いたと明言していますが、卵のように丸い羊の体は、写実よりも二次元的な形の面白さを追求しているように思います。

この「二胡羊図」は、漢の時代、匈奴に囚われた蘇武と李陵を暗示しているという解釈があります。異民族に囚われても屈服しなかった蘇武とやむなく降伏した李陵、対照的な生き方をした二人の姿が対照的な描法で描きだされているというのです。李陵が蘇武に降伏を説得に行った時、蘇武はバイカル湖の畔で羊を飼って暮らしていたといい、趙孟頫は、そこに題材を取っているのかもしれませんが、山羊と羊、どちらが蘇武でどちらが李陵かは、意見が分かれるところですが、皆さんだったらどう考えますか？

趙孟頫は元の初期に活躍した文人で、異民族のモンゴル王朝に敢えて仕えて、漢民族の伝統が滅びるのを内側から防ごうとしました。しかし、当時の知識人には、そうした態度を潔しとしない人もいました。まさに蘇武と李陵の生き方のように、社会の考え方が二つに分かれていたのです。

李陵のように批判を浴びた趙孟頫がこの絵に込めた思いはどのようなものだったのでしょうか？山羊は頭を低く下げ、羊は昂然と頭を上げているようにも見えます。趙孟頫が言う写生は、外形のことではなく、人間の生き方に現れる内面的な真実のことだったのかもしれませんが。

著作権の関係から、写真を掲載しておりません。
ご了承ください。

趙孟頫筆「二胡羊図」（部分） フリア美術館蔵

研究室紹介—File22

知の探究

研究室名：哲学研究室

哲学研究室のメンバーは、国際色、個性ともにとっても豊かです。それぞれの研究対象は異なり、プラトン、アリストテレス、エピクロス派、デカルト、カント、ベルクソン、ハイデガー、ヴィトゲンシュタイン等々の西洋哲学、また西田幾多郎をはじめとする近代日本思想の研究をしている人もいれば、フィクション、メタファー、正義など、テーマを決めて研究する人もいます。しかしまた興味・関心が同じ人で集まって、授業以外の読書会・勉強会も開いています。多面的な角度から新しい発見をすること



ができ、日々たくさんの刺激をもらいながら過ごしています。また、授業がない時間帯にはソフトボールの練習をしたり（頑張って他の研究室に勝つぞ!）、夏の合宿などの行事もあり、A sound mind in a sound body も実践しています。

哲学研究室のいいところは、誰かが一つ分からないことを昼休みに問いかけると、みんなが一緒になって考えてくれることです。研究室の本や論文集を調べたり、ネットで古い文献のフリーソースを用いて元々の言語ではどんな意味だったか見てみたりと、宝探しをするかのように共同して探索するのです。

中学・高校生の皆さんは、授業・テスト・部活・受験などで多忙を極め、授業では多くの主題をさらっと眺めるだけで通り過ぎてしまい、さらに深く調べたり考えたりすることはなかなかできないと思います。しかし、一つの問題を多面的に究めていくこの「知の探究」を、哲学研究を通して経験することができます。これは大学ならではの、さらには哲学研究室ならではの特別な楽しみだと思います。皆さんも、私たちと一緒に探究しませんか？

[井上 佳奈（博士前期2年（執筆時））]

学生たちの研究生活—File1

海外の寿司屋さんを研究する

研究室名：社会学研究室

僕は海外の寿司屋さんを研究しています。

今、海外の寿司屋さんは約五万店あると言われていています。海外の寿司屋さんはどんな魚をどのように仕入れているのか？職人たちの師弟関係はどうなっているのか——多様な国籍や民族の人々がワザの伝承や発展に関わったらどうなるのか？こうした疑問を解いて、世界各地で寿司業という産業がどうやってつくられていくのかを知る。それが僕の研究です。

研究の醍醐味は、自分の手で新しい知識をつくること。言い換えると、今まで知られてこなかった「人々の社会的な営み」を知ることです。マクドナルドのような世界規模のチェーンは、どこでも同じように運営され、同じようにつくられた食べものが出てきます。食のグローバル化はそういうものなんだと言われてきました。ところが、寿司業のグローバル化はそれとは違うらしい。どのように違うのか、なぜ違うのか——それを知るために、現場に行き、職人の方々にインタビューやアンケートをして調査します。

調査をしていると、教科書に書いてあることと違う現象や、想像もつかなかった事実にぶつかります。それを自分の手で見つけ、研究室の仲間と議論したりして、新しい知識へと発展させていくのです。現場で「新しいことを見つけた！」時の面白さ、ワクワク感はたまりません。とはいえ大学院生の僕は修業中の身、よく失敗します。そんな時は、とても落ち込みます。

こうしてつくられた新しい知識は、いろいろな人の役に立つこともあります。例えば、海外で寿司職人の働きやすい環境をどのようにつくるのか。日本政府の文化政策をもっとまともにするにはどうしたらよいか。こうしたことを考えるための土台になるのです。

[王 昊凡（博士後期3年）]



上海の寿司ランチ（約2500円）。僕は約20年前に日本に移住した中国人ですが、当時「中国人が喜んで寿司を食べる」なんて想像もつきませんでした。

最近の文学部

あけましておめでとうございます

本年もみなさんにとって、素晴らしい一年でありますことを、心よりお祈り申し上げます。

月刊名大文学部も新企画「学生たちの研究生活」を掲載しております。文学部では、卒業論文のテーマとしてなにを研究するかは、基本的に学生が自分で選択することができます。文学部の学生たちがどのような研究をおこない、そこにはどんな悩みや楽しみがあるのかを、赤裸々に語っていただきます。お楽しみに！（K記）